月刊 アジアの友 第386号　2000年6月10日発行　1966年10月25日第三種郵便物許可

アジア学生文化協会の機関誌
「アジアの友」'00, 6月号 巻頭言欄

わずかな20世紀へ

ひと

窮すれ

天草に移住した直接の動機は、祖父が代議士を務めたことがあったので、その地盤を利用して国政選挙に立候補するためでした。結果は落選。そして再挑戦の予想に反して、私が始めたのは食物の自給・自足・自炊の生活でした。お金のかかる選挙運動は繰り返してはならぬと深く反省しましたし、政治の仕事として取り組みたかったのは人口、食糧、エネルギー、環境などの諸問題でした。都会育ちの私にとって基本的な生産現場の体験は、選挙の当落に関わりなく必須のことでした。

5月の連休は家族皆で一番草の除草に励む

環境を損なわぬよう農薬や化学肥料を用いず、化石燃料の使用も極力控え、限られた農地で得られる最小限の食物で健康を維持するにはどうしたら良いのか、これは現金収入の限られた立場やイザという時に大いに参考になるはずです。何の知識も技術もない私はまたとない実験台でした。

それまでの食生活は、一変して玄米菜食が基本となりました。野良では手植え手刈りの稲作を柱に、麦・豆・芋類、ナタネ・ゴマなどの主要作物…糞尿は野良に戻す。自給の自信もついた5年後には伴侶を迎え、出産の時は私が赤ちゃんをとりあげてヘソの緒を結びました。山あり谷ありの日々…。有機農業をはじめとする環境NGO活動にも関わって、かれこれ4半世紀が過ぎました。

今、改めて野良で心身を磨き直そうと思っています。私の

こと

まぢかな21世紀へ

ば通ず

中井俊作

863-2424.
天草市五和町手野
1の2646
0969-34-0054
090-1082-8109

社会的活動を支えてきた財源が底をつきますし、今まで目をつぶってきた溜池・水路、土手・農道、建物・家屋に山林などの修繕、手入れをこれ以上放置できません。

ではライフワークとしての諸課題（取り越し苦労？）はどうするのか——これについては"窮すれば通ず"という言葉に望みを託したのです。

"窮すれば通ず"、行き詰まって困り切るとかえって活路が見出されるということですが、私は「人は躓かないと方向を改められない、躓くと転んで（その痛みで）それまでの思い込みから目がさめる、すると意識が変わり視野が広がって…無理と決めつけていた方向に自ら進んで歩み出す」と解釈しました。気候温暖化をはじめとする地球環境問題は、人類の緩慢な自・他殺行為に等しいわけで、"窮する"日はそう遠くないでしょう。躓いたり転んだりの内容がどれ程のものとなるかはわかりません。いずれにしても死ぬ程の目に会えば人は変わる、いや、それ程の目に会わないと（原子力や化石エネルギーに甘えている）人は変わらない？！

"転んだ"時に、私がまだ生命に縁があって少しでもお役に立てれば本望です。いやいや、こんな想像自体が笑い話で済まされるなら、その方が余程望ましいことですね。

日本有機農業研究会で自炊・宿泊しながら新基本法対策中の筆者

中井俊作氏のプロフィール

1946年東京生まれ。'69年早稲田大学（理工）卒。'72年新日本製鉄（株）退社、同年衆院選に立候補、落選。選挙の後始末を終え'76年より帰農。熊本県の有機農業運動役員、苓北石炭火力発電所、西武ゴルフ場計画などの反対運動世話人、地元の町の公民館、農協青壮年部、寺社の世話役、役場審議員なども勤める。地球緑化の会（タンザニアでの緑化活動：本部熊本県）の監事、役員
町の一消防団員。
'04.2～'06.3 町議会議員（合併前の天草郡五和町）
NPO 天草きぼうの家（精神障害者支援）
天草の自然を生かす会
中井手環境美化推進員
井手 前水利組合長.

近況

二〇〇〇年二月

中井　俊作

Y2K問題では半分ホッとして、半分肩すかしをくった気分で正月を迎えました。勿論、物騒なことは起こらないにこしたことはなく、この場合肩すかしをくらうのは結構なことですし、この先の小生の人生も相変わらずの慢性取り越し苦労症で終えたいものです。さはさりながら破局曲線上を歩んでいるとしか映らない人類の今日までの足取りは、無事に21世紀を迎えられたとしてもこのままで済まされるとは思えず……。

この三年程の間、自給農のかたわら最優先課題としていた「食料・農業・農村基本法」対策は昨春で日本有機農業研究会の担当幹事を降り（会の財政上、幹事減員の要有り、自ら手を上げました）、一会員としてその後のフォローを

と考えていたのですが、九八年は延べで五カ月（内四カ月は東京の研究会事務局に寝袋で宿泊・自炊）も天草を離れたので、昨九九年はその後遺症＝農事・家事に追われ、その上秋からはY2Kに気を塞がれて（コンピューターの誤作動によるトラブルよりもこれを契機としてイスラム復興運動などうっ積していた民族間のストレスが火を吹くのでは、と気掛かりで）思うにまかせぬ一年となりました。

秋といえば台風の後始末、こちらは道をふさいだ倒木の片付け、飛ばされた瓦の補充など応急処置をしただけで、ちゃんとした補修、山の中の傾・倒木の始末はこれからです。

外出を控えた分、来訪者を迎えることの多かった秋でもありました。応対することは

我心身を鏡に映すようであり、改めて気づき、学ぶ機会となりました。有り難かったのは昨師走半ば、食料・農業・農村基本問題調査会の会長をつとめておられた木村尚三郎先生御夫妻が《天草の旅》を思い立って下さり、三日間にわたってガイド役をつとめ我が家にも御案内できたことです。これは基本法対策幹事をつとめた御褒美とでも申せましょうか。ガイドのかたわら永年胸の内にためこんできた様々な想いをかなり一方的にまくしたてたものですが、御夫妻は暖かく耳を傾けて下さいました（内心閉口しておられたのかもしれませんが）。

ところで賃仕事（勤め）に出ていない小生のこと、自給程度の農事にさほど時間をとられるとも思えず、日頃一体何をしているんだろうか、といぶかる向きもおありでしょう。家計の立て方、回し方、折々の農事・家事の内容、山林（一八〇ヘクタール）や家屋・建物（三棟の住家と付属納屋、戦前に村役場と産業組合事務所として建てられた建物と倉庫）の管理、ムラ役、公役、ムラ付き合い（消防団員、寺社の世話人、小組合当

番、道・川・水路掃除、公民館に学校行事、婚・葬・祭＝氏神・地の神・山の神・お稲荷さんに地蔵様……）、有機農業や環境問題を軸とする社会的（市民）活動に至るまで、土の上に汗を流しながらムラに暮らすということがどういうことか触れたいことは多々あるのですが、これらのことはいずれまとめて「我が帰農の記」として御報告する所存です。ここでは日常の時間の過ごし方で実際にはかなりの比重を占めている〝私の情報修練〟について記します。

朝一番の日課は新聞（日本農業新聞）のTV番組欄をチェックし、目ぼしい番組をマークすること。

もっぱらNHK（BSを含む）ですが、ワールドニュースから海外のドキュメンタリー、特集もの、学校放送、教育セミナー、人間大学など再放送分を含めて午前から午後へと続きます。画面を追いながら新聞に目を通します。マーク番組の切れ間は録画（卓上にはジャンル別に常時二十本程のビデオテープが並んでいます）したままで目通ししていないテープを再生したり……。（いつの間にか昼になります。郵便局の窓口にパート勤務しているカミさんが昼食に戻るので、五分程離れた《家族の家》に向かい食事をとりつつ――小生は朝食をとりません――夫婦の会話。午後はできるだけ外の作業を手がけます。これが農事・家事の時間帯というところです）

TVから離れると今度はイヤホーンラジオのスイッチON。こちらももっぱらNHK第一、第二放送。こうして日が暮れます。

夕食は家族が顔を合わせて会話する（入浴もそうですが）大切な時間としていますが、ここでもTVのスイッチは入れたまま。ただ「3年B組金八先生」「たけしの万物創世記」「知ってるつもり」「神々の詩」などの若干の民放番組もはいります。九時から十時のあいだに〝仕事部屋〟に戻ります。これから〇時から一時頃まで、特集もの、ETV、BSの画面を追います。（何でこんなことをしているのか……。世の動きを見つめつつ思考のバランスをとり、心を練り、〝言葉を紡ごう〟としているのですが、全ては小生の中に根ざす拭い去りようのない《危機感》がそうさせているとしか言いようがありませ

ん。この点についての説明は改めて二〇〇一年秋以降にさせて頂くつもりです。）　標準的にはかくなる日常ですが、録画したテープの整理も手が届かない有り様ですから、ましてや書籍や定期刊行物（雑誌・会報・通信など三〇余誌紙……財源払拭につき間もなく止めますが）は……、頂いた年賀状やお便りは御返事しようと思いながらもあっちに積まれこっちに積まれ……（これがもう二十年来！）とうとう妻や娘達は居場所がなくなって引っ越してしまった……十年前のことでした。家の中でこの始末、要するに自給農業だけでもようやくこなしている、というのが実情なのです。

おしまいに今後のことをちょっと触れておきます。

今年は二月末～四月初めまで三度目のアフリカ・タンザニア行（外務省の助成でNPO地球緑化の会よりの派遣）、あとは（世に〝火の粉〟が飛ばぬ限り）天草にて諸事片付けに精励、この数年の懸案であった旧役場建物の交流拠点化（古本図書館など）は（社会的活動財源が底をつく）二〇〇一年秋（五十五才の誕生日）までに仕上げ、その後は天草に腰を据える（家畜の導入）所存です。それまでに南米、豪州の食料生産地帯を目にしておきたいのですが……。

（天草／熊本有機農業研究会）

エッセー　便り

現代医学はほんとうに進歩したのか

田野　泰敏（船橋市・鉄工業）

現時点で社会福祉の為と称して支出する厚生省の医療費支出予算は、毎年30兆円に上り、財政赤字は年々累積し続けている。その根本原因は医学の進歩によって国民が長寿を保ち、高齢化社会になった為の必然の結果である、との論議が臆面もなく罷り通っている。が、現状に私は黙っていられない程腹が立つ。

医学が正しい意味で進歩しているのであれば、病人不在の健康社会が実現し、皆が百才以上の長寿で天寿を迎える日まで、ピンピンコロリの極楽死で、医療機関の世話になる期間は極限まで零に近づくはず。私の家では義父は90才で没したが、入院は僅か十日間、眠ったまま食事代わりの栄養点滴だけ。94才の母方の伯母、97才の父方の叔母も似たような最期だった。高齢者が医療費を殖やしているのではなく、現代医療機関が企業利益のために殖やしているにすぎないと断定したい。

もう一つ現代医学に申したいのは「人体は生きたボイラーで食物はその燃料」という見解は全く論拠のない盲説であることだ。基礎代謝熱量一，三〇〇kcal＋活動エネルギーχkcal＝生活エネルギーの公式は、荒唐無稽の空論にすぎない。

然るに未だ医大ほか学校の教科書まで、この盲説を真理として教えこんでいるのが許せない。早い話が地球上の生物は、生きた太陽光電磁波によって飼育されている。食物とは太陽光エネルギーを蓄積した電池であり、カロリー計算で表示すべきものでなく、強いて数式表示を求めるならワットですべきである。むしろ生きたパソコン、ワープロとするほうがまだましだ。東洋医学の陰陽二進法を基根とした理論体系にも通ずる。

落ち切らねば目覚めないのか、日本は

九里　茂三（米沢市・九里学園長）

何か瓦礫が崩れ落ちるような昨年来の不祥事ばかりで、日本社会がもろくもくずれ落ちるような不安と憤りの中で、賢いはずの識者たちに、その憤りの言葉もなく、まして驚世の語が余りにも弱いのはどうした事でしょう。みんな賢くなりすぎて、面倒な事は見ざる言わざるなのでしょうか。情報も無責任極まる馬鹿げたその日暮しのような報道ばかりで、テレビなどつけては憤り、それでもつけて何かを探し求める毎日です。

戦前の日本は余りにも狭い視座しかもたなかった為に、世界に向って独善を晒け出し、しかも敗戦時の誓いも経済万能の風潮の中で語る者さえ無くなったという有様です。どこまで失敗したら日本人は、真実に目覚める事ができるのでしょうか。

落ちる所まで落ちるしかないと、今は思います。声をからしても聞く耳がなければ聞こえないでしょう。どうにもならぬ所まで落ちて救われたい思いが生れて、はじめて聞く耳を持つことになるのではと思っています。まちがいでしょうか。

21世紀の人間の在り方生き方はどうなるのか

伊藤　惣造（札幌市・元高校教諭）

ますます未来に向けての熱意ある主張に感激し、その語りぶりも、学生時代に接した姿と全く変わらないのは驚きです。

今の時代は仰せのように混濁し、何が人間らしい生き方なのか寄るところなく、ただ流れに流れるばかりで、瞬間瞬間の明滅に右往左往しているばかりの悲しい状況に陥っています。

大地に根ざし、自然に順応し農を本とする人間の生活は大切で、それが根本です。高層マンションの林立する都市風景では、太陽光を遮り、隣人との友情は育たずただ便利のみ。「家」の概念も変わり、親子別居が当然の世相となり、どう考えたらよいのか。中国の老舎の追憶では、北京での四戸が中庭を囲んで団欒できる生活がこよなく懐しく楽しかったと。個（戸）別と共同いづれが良いのか。